法の水茎 (60)

大正大学講師　髙橋秀城

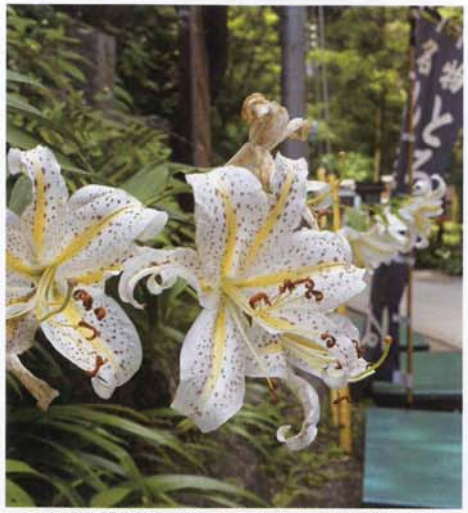
人の言葉を理解して、話を交わすことができる花があることをご存じでしょうか。それは、「解語の花」と呼ばれています。もともと、中国の唐時代、玄宗皇帝（六八五～七六二）が池に咲く蓮を見ていたときに、寵愛する楊貴妃（七一九～七五六）に向かって、「池の見事な蓮の花も、この解語の花には及ばない」と語った故事に由来しています。以来、「解語の花」は、美しい女性の形容として用いられてきました。

日本においても、

立てば芍薬
座れば牡丹
歩く姿は百合の花

という似た意味合いの言い回しがあります。反骨の奇人として知られる宮武外骨（一八六七～一九五五）は、このように喩えられる女性は美しく、まるで「解語の花」のようだと語りました。

「芍薬」も「牡丹」も「百合」の花も、この時節にピッタリの麗しい花々ですが、もちろん花の美しさのみを誉め称えたものではありません。ここには、「立つ」「座る」「歩く」という人の動作も織り込まれています。立ったり座ったりする日常的な「立ち」「居」を細やかに省みることが、やがて百合のような「振る舞い」の美しさへとつながっていくのでしょう。「芍薬」「牡丹」の基礎を身につけ、「百合」の夏へと季節が移れば、きっとこれまで以上の美しさを兼ね備えているはずです。


夏を迎え「解語の花」と称された山百合が咲く

夏の雨に
庭の小百合は
玉散りて
涼しく晴るる
夕暮の空

（慈円『拾玉集』）

（夏の雨が降り残した、庭の小百合の水滴もまろび散って、涼しく晴れ上がる夕暮れの空よ）

「解語の花」とも称された山百合の花は、雨上がりの夕空のもとで、何を思って佇んでいるのでしょう。涙の玉を拭った後のように、茜色に染まった表情に心惹かれます。

ところで、日常の立ち居振る舞いを「起居」とも言います。例えば僧侶は、毎日のお勤めの際に、御本尊様の御前で三度礼拝しますが、膝を少し屈める作法から「起居礼」とも言われます。それは日頃から仏様を慎み敬う、祈りの美しさが表れた姿と言えるでしょう。清らかな装いは、男女を問わず奥ゆかしいものです。

では、どのようにすれば「正しい振る舞い」が身に付くのでしょうか。美しい所作の基本は、どのようなものでしょう。

鎌倉時代の説話集には、人の振る舞いをめぐって、次のような戒めが語られています。

だいたい、人の振る舞いが乱れるのは、自分の心に、周りを見下す驕慢（驕り高ぶり）があって、思いを廻らす心が足りないから起こるのです。これが原因で、ついには人生を無駄にして、後悔を深くすることもあります。

たとえ自分自身が素晴らしいと思っていても、昔は良かったと懐かしく思い返しても、何かに興味を惹かれても、よくよく人目を気遣って、世の中を慎み深く受けとめるべきです。自身の思うままの心に従ってはいけません。

ですから、あるお経には、

心の師とはなるとも、
心を師とせざれ

と書かれているそうです。

貧しい者には、自由気ままに振る舞う者が多く、豊かな者には、驕り高ぶっている者が多いものです。これは人間の常ですが、身分が高くなり徳が増すにつれても、よく心を静め、穏やかな心持ちでいることを、まず考えなければなりません。

（『十訓抄』）

この話の中では、「心の師とはなるとも、心を師とせざれ」（心の師にはなっても良いが、心を師としてはいけない）という教えが引かれています（鴨長明『発心集』序にもあり）。正しい立ち居振る舞いを身に付けるためには、外見を真似るだけではなく、まず自らの心を磨く必要があるというのでしょう。

自分の心は、自分でしか管理することができません。

人間は実が入れば仰ぐ
菩薩は実が入れば俯く

（人は、地位が上がり権力を手に入れると高慢になる。幸せを求める者（稲）は、実るほどに俯いて謙虚になる）

という言葉もあります。ついつい甘やかしがちになる心を律して、真の立ち居振る舞いを体得することができればと思います。

雲雀立つ
荒野に生ふる
姫百合の
何につくとも

（西行『山家集』）

（雲雀が飛び立つ荒野の姫百合が揺れているように、何に頼ることもない、しなやかな生まれつきの心よ）

「百合」には「揺り」が掛けられているように、姫百合は頑なに他を拒むのではなく、まるで吹き抜ける風に身を委ねているようです。控えめに俯く百合の花を眺めていたら、「敬う気持ちは大切ですよ」と、そっと話しかけられました。

（栃木北部教区普濟寺）

折り折りの記 (94)

波多野　重雄

高尾路の梅雨の滝音琵琶滝路

高尾山に登る路は幾筋もあるが、私は急峻な琵琶滝路が好きだ。梅雨に入り高尾の細流も白波を立てゝ疾く琵琶滝は轟音。滝に水垢離者の白衣は飛沫を浴びる。

或時、私はこの路で風の強い夕暮時、巣から落ちて鳴き叫ぶ山雀の雛を巣に戻した思い出がある。

六月は野鳥の営巣期でお山も時鳥、郭公等でにぎわう。「おくのほそ道」に芭蕉の詠んだ「五月雨をあつめて早し最上川」の雄大な句もこの頃であろう。

（高尾山健康登山の会長）

雨中遊歩

厚木市　荒井　一雄

入梅心鬱鬱
思不参深山
何是不信心
入信参雲山

雀の子
飛び方習ふ
夏山路

梅雨に入りて、心、鬱鬱なり…
ふと思ふ（今日は）深山（高尾山）に参らずるかと…
何ぞ是れ不信心！
入信（信仰生活に入る）せしは、（雨・槍に向かひても）雲山に参らん…

奉納御礼

このたび、八王子市にお住まいの増山進・史子ご夫妻の御奉納によりまして、新たに大本堂大太鼓の、鼓面の皮の張り替えが行われました。

この大太鼓は、御護摩供修行の際に、般若心経がお唱えされている間に打ち鳴らされます。

茲に謹んで重ねて御礼申し上げます。